

# 校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

## 学校における子どもを取り巻く厳しい現実

### 1. 子どもはいつの時代でもダブルスタンダードの中で生きている

子どもは、「望ましい社会規範」と仲間内の“オキテ”の狭間で毎日息苦しさや悩みを感じながら生活しています。いじめを先生に告げることは、社会一般のルールでは正義の行為ですが、子どもたちの規範の中（オキテの世界）では“チクル”と言い、卑怯で「最悪」の行為となり、集団による厳しい制裁が待っています。その告げ口がわかれば、たちどころによりひどいいじめの対象者になります。いじめの首謀者たちは、制裁があることを仲間内に公言し、あるときはそれを実際に見せることで、自分たちを守りいじめを継続していくのです。普通の子どもたちに、それを超えてまで正義を貫けというのは、極めて酷な話で、到底子どもを責めることはできません。また、たいていはよからぬ秘密を共有することで結束を保っています。（たいていは誰かの秘密やひどい悪口、悪だくみです）そのためグループの考え方や約束が社会的な善悪の判断を超え、自らの思考や行動の判断基準となり、同一グループ内では、積極的な同調行動がみられます。このように子どもたちはダブルスタンダードの中で常にジレンマを感じながら生きています。いじめが発生する集団は、正義や社会のルールが通る公正な集団ではなく、彼らが共有している“オキテ”が完全な優位を保ち、それが集団を支配している状態なのです。

### 2. 集団の中に居続けるには、本当の自分とは違う個性を演じる必要もある

最近の子どもたちは、本音をぶつけ、多少の対立があってもそれを解消しながら仲良くなっていくような面倒な友だち関係を嫌います。とりわけ正義感の強い子や個性の強い子は仲間から疎んぜられます。それだけに、互いの対立がなく、集団の中で摩擦のないフラットな関係を求めようとします。そして軽く当たり障りのない付き合いで満足するのです。その雰囲気にならなかつたり、その集団の空気が読めないとすれば、たちどころに仲間から外されます。特に女子は、仲間の中で「キャラがかぶる」ことを自ら避けようと言われているとされています。仲間は主に、リーダー格、サブリーダー、ポケ役、ツッコミ役、天然といったキャラで構成され、いわばそこでの“ノリ”の善し悪しが仲間に評価されていきます。それが本当の自分とは違っていても「固定して演ずる」ことが、集団の中で生き残る術なのです。そんな世界では、仲間付き合いに“疲れる”ことは容易に想像できます。

### 3. 学級で出来ている階層（ヒエラルキー）は、教師がつくっていると言ってもよい

学級の子どもたちの中には「ヒエラルキー（“スクールカースト”と著作の中では呼んでいる専門家もいます）」が存在するという指摘が何人かの研究者によってなされています。事実、ひどい学級では発言も学級のボスの暗黙の許可を得てから行ったり、最下位層の子どもは勝手に笑うことさえ許されなかったりという、全く非常識な実態もあります。

しかし、それはあたかもどの学級にも自然とつくられるかのように言われていますが、それは間違いです。そうなっている学級は、たいていは、教師が無用な競争原理を学級に持ち込み、学級に「勉強のできる者とできない者」、教師の都合で子どもを凶る評価の物差しだけを用いている結果「教師のお気に入りの子とそうでない子」等の「表の階層」を教師がつくりだしています。（もちろんそのことに気付いていない教師がほとんどですが。）そのため、そのアンチテーゼとして、「裏の階層（カースト）」が出来上がっているとみることが自然であり、事態を容易に説明することができます。立場の弱い子こそ大事にされみんなが活躍する支持的・応援的な人間関係や風土がつけられている学級では、そのような階層の分化、ましてやスクールカーストなどはみられないと断言することはできます。